
電腦世界『ネクスト・ワールド』

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電腦世界『ネクスト・ワールド』

【Nコード】

N9855T

【作者名】

Rail

【あらすじ】

五十年のコールドスリープから目覚めた伊佐君は、電腦世界『ネクスト・ワールド』にいたく興味を示したようだ。せっかくなので『ネクスト・ワールド』の中を案内したのだけど？

「『コンピュータ・ワールド』」。

「この世界に入るためには、卵型の『コネクタ』と呼ばれる機械に入って寝そべり、『コンピュータ・ワールド』と神経をつなげばOK。

そうするとその人間は昔の映画のマトリックスよろしくリアルな仮想世界へと意識を転送することができるというわけだ。

「この仕組みができてから三十年。バージョンアップにバージョンアップを重ねて、今やコンピュータ・ワールドには世界中から三億の人間がログインしているというわけさ。」

「僕がそう説明すると、目の前の青年は顔を輝かせた。」

「つまりはVRMMOなんですね！」

「VR……？　それが何かは知らないが、仮想現実というやつだよ」「すっげえ！」

「……僕は未来の世界がみたいからと試験段階のワールドスリープに挑戦した君の方がすごいと思うがね」

「22世紀は宇宙を目指した世紀だった。」

「21世紀の内に月や火星などの近い星へは降り立つことができたのだが、それ以上に遠い星へ行くには課題があった。」

「燃料と、乗組員である。」

「こと燃料はロケットを改良することで年々燃費を上げることができたが、乗組員は違う。日々の生活に食料が必要だし、酸素も必要だ。遠くに行くにはトラブルも予想して多くの人員が必要だが、それに伴って多くの物資も必要となる。」

また、往復に数十年かかるだろうと言われていた宇宙飛行では、乗組員が普通に生活していれば加齢によって肉体が衰える。

その両方を解決する糸口となったのが人工的な冬眠だ。コールドスリープ

人工的に体温を下げ新陳代謝を低下させることによって人間を仮死状態に保ち、エネルギーの消費を抑える。同時に加齢も鈍化させることができ、乗組員たちの鮮度を高く保つ。

といっても課題は多く、短期中期長期のコールドスリープは人体にどのような影響をもたらすのかというデータが足りなかった。

こと長期のコールドスリープでは、周囲の人間との時間差が出来てしまい、ちょっとした浦島太郎状態に陥ってしまう。そのため被験者がなかなか集まりにくい状態だった。

そんな中、我こそはと名乗りを上げたのが今僕の目の前に居る伊佐君である。

未来の世界が見たいと言った彼は、まだ大学を出たばかりだといふのにこの五十年に渡るコールドスリープの被験者に名乗り出た。

……就職活動に失敗したから現実逃避の一環であるという噂もあるが。

見た目は二十代の伊佐君だが、生まれた年で考えると現在30代の僕よりも四十歳ほど年上ということになる。

色々伊佐君には検査を受けてもらったが結果は上々。これならばコールドスリープが実用化される日も近いだろう。

さて、五十年も眠っていた彼だ。たった数年生まれが違うだけでもジェネレーションギャップがある時代だ。当然彼の知識と現代の

ものには大きなギャップがある。

それを埋めるための勉強会が今やっていることなのだが、

「俺、俺、ネクスト・ワールドにログインしたいっす！」

伊佐君は顔を紅潮させて言う。

おかしなことを言うものだ。

「検査が全て終わったらできるんじゃないかな。というか、そのうちしなきゃいけなくなるかもしれない」

「そうなんですか!？」

僕は彼が興奮する理由が分からず、首を傾げた。

伊佐君は『ネクスト・ワールド』の原型が出来上がったところにはすでにコールドスリープに入っているわけだから、予備知識はないはずだ。それに彼の反応を見るに、何か勘違いをしていそうだし、しょうがない、百聞は一見にしかずだ。

「なんなら、今から『ネクスト・ワールド』に入ってみるかい？」

この施設にも『コネクタ』はあるから」

「っはい！ 是非！」

嬉々としている彼を見て、やっぱり何か勘違いしてるんだろっなあと思う。

五十年のジェネレーションギャップはなかなかに厳しい。

『コネクタ』はごくシンプルな作りだ。外観は大きな卵。ドアを

開けると中には寝返りがうてて体を起こせる程度の空間。頭を載せる部分には神経と『ネクスト・ワールド』をつなぐ機械がある。

開発初期はヘルメットを装着していたそうだが、現在では特殊な電気信号を送ることで直接電気信号を送らなくともログインできるようになった。

「じゃあ中で寝転がって」

「はい！」

嬉々として伊佐君が『コネクタ』の中に入る。

僕も隣りの『コネクタ』に入った。

「あー、目的地、コールドスリープ研究所、コード20A302W。

同行者、伊佐」

『認識しました』

電子音声が流れる。

途端に体を引っ張られる慣れた感覚がした。

次に意識が戻った時には、僕は見慣れた場所に立っていた。コールドスリープ研究所の一階、接続したとき最初に送られるコネクタセンターだ。

「主任、おはようございます」

「うん、おはよう」

僕は受付のワズに挨拶をする。

「ここは？」

伊佐君は興味津々の様子であちこち見まわしていた。
僕は笑った。

「ネクスト・ワールド内にあるコールドスリープ研究所だよ」
「へ？」

何故か伊佐君は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。

「も、モンスターは？ ギルドは？」

慌てたように言う伊佐君に、僕は今度こそ首を傾げた。

「研究所にはそういったものは必要ないなあ。どうしてそんなものがいると思ったの？」

「は？」

五十年前には、研究所にモンスターがいたのだろうか。聞いたこととはないが。

僕が分かっているのを察してか、伊佐君はじれったそうに言う。

「だって、VRMMOなんでしょう？ ゲームなのにどうして敵モンスターがないんですか？」

「は？」

今度は僕から間抜けな声が出た。

おいおい、伊佐君は何を言ってるんだ？

「ネクスト・ワールドはゲームじゃないよ。仮想現実だ。世界中か

「たくさんの人がログインしている」

「それは聞きました。だからそれはゲームで遊ぶためじゃないんですか？」

「……伊佐君が大学生のころにはそういうゲームがあったのかい？」

「パソコン上でなら」

「うーん……」

それで伊佐君が勘違いしてしまっていたのか。

僕は思わず唸った。

「伊佐君、案内しながら説明するよ」

僕は伊佐君を促して歩き出した。

最初に通ったのは第一研究室。半透明のガラスの透明度を上げて、中が見えるようにする。

「ここはコールドスリープの精度を上げる研究をしている場所」

中にはエジプトのアミン、フィンランドのヨハンナ、ロシアのマルクがいた。ウィンドウに映し出されたデータを見ながら熱心に話し合っている。

その部屋を通り過ぎると、第二研究室。こちらも中が見えるようにすると、たまたま休憩中だったのか中に居たメンバーと視線があった。

「あつちで手を振ってるのが左から韓国のユナ、スウェーデンのダグ、イタリアのデボラ、イギリスのアドルフ」

「Hi! Good morning, Mr. Issa!」

アドルフが喋ると、中空に「やあ、おはよう、伊佐さん」という字幕が浮かんだ。

「イサシヌン、キヨナクトゴ、コジムニカ？」

ユナの顔の下に「伊佐さんは見学されているのですか？」という字幕が浮かんだ。

「そうだよ。ネクスト・ワールドに入ったのは初めてだそうだ」

僕からは見えないが、彼らにも僕の喋っていることは字幕付きで見えるはずである。

それぞれから一言メッセージを貰って次に歩き出す。

第三研究室は会議中だったので飛ばして、空いている会議室に入った。

何か、伊佐君が呆けている様子だったから座るように促した。メニューを呼び出して、コーヒーを注文する。五秒としないうちにテーブルの上に二人分のコーヒーが出現した。

「どうかな、伊佐君。初めてのネクスト・ワールドの感想は」

僕が問いかけると、伊佐君は我に返ったようだった。

「すごいっすね……まるでリアルと変わらない」

「だろう？」

ネクスト・ワールドを最初に利用した人はまずそこに驚く。仮想現実というからにはもっと出来の悪いものだと思っていたと。

「あの、ネクスト・ワールドっていうのは何をやる場所なんですか？ みんな仕事してるように見てたんですけど」

まるで腑に落ちないといった様子で伊佐君が言う。

ふむ、この様子じゃネクスト・ワールドの存在意義が分かっていないようだ。

「何をやるって、もちろん仕事をするための場所だよ。オンラインでね」

僕はネクスト・ワールドの歴史をつづった本を呼びだした。成り立ちから説明しよう。

中空に浮かんだいくつかのウィンドウに該当箇所をピックアップする。

「この仮想空間の素晴らしいところは、現実世界に酷似しながらもオンラインだからほぼタイムラグなしに世界中の人間がログインできるところだ」

該当記事を拡大する。

『世界の裏と表をオンラインでつなぐ』と書かれていた。

「今までやっていた学会なんかも、全てオンラインで出来るようになった。つまり『コネクタ』さえあれば、自分の研究室に居ながらにして世界中の学者たちと会って討論することができるようになったというわけだ」

次の記事。『全世界の医師が集まる学会、定期開催決定』という見出しが躍っている。

「学者、医者、研究者、企業家、宗教家、政治家。そういった人々はネクスト・ワールドの登場によって幅広い交流を持つことができた。そしてさらにそれに機能が加わり、さつき君も体験しただろうか？ リアルの世界では不可能な、同時翻訳の字幕まで」

翻訳機能が付加されることにより、他国の人間とも交流が容易になった。当初は翻訳の精度がいまいちだったが、年々改良され、今や専門用語は完全に網羅、ニュアンスすら伝えられるほどの翻訳っぷりとなった。

「セキュリティ面も年々強化されていて、今や世界一のハッカーをもってしてもネクスト・ワールドのセキュリティは破れない。研究内容が漏れることもなければウイルスに感染することもないってことさ」

何故か伊佐君は固まっていた。
とりあえず僕は説明を続ける。

「対応できる人数も増えたからね。ネクスト・ワールド内に会社や研究所を作ることも多くなった。ネクスト・ワールド内であれば、その人の家がどこだろうと毎日出勤できるからね。同じ職場に居ても、その人の住む家は日本とアメリカ、ロシアとオーストラリアみたいにしてバラバラってことが起こるわけさ。伊佐君もそういった会社に就職すれば、家に『コネクタ』を設置してそこから出社するようになるんじゃないかな？」

気がつく、伊佐君はわなわなとふるえていた。

顔を紅潮させた伊佐君は、ぎつとこちらを睨んできた。そして、

「ゆ、夢がない！ 仮想空間が実現できたならゲームに転用すべき

でしょう!？」

唾を飛ばしながらしゃべる伊佐君を見て首をかしげる。
はて。

「夢がいつぱいだと思うけど。世界中の人間とリアルタイムでやり取りできるなんて昔と比べると夢のようだよ？　しかも翻訳までしてくれる。離れた場所に居てもメッセージを飛ばすこともできるし、ネクスト・ワールド内の移動は歩かなくともコードを入力さえすれば一瞬でできる。そもそも体を実際に動かすわけじゃないから疲れはないしね。ああ、もちろん一定は筋肉に刺激を与えて動かしているよ。床ずれなんかもあるし、一日中寝ているようじゃ筋力も落ちるからね。ログイン中は食事ができないから点滴や流動食で栄養を補充できるようにもなってるし」

「夢がない!」

五十年のジェネレーションギャップは、よく分からないままに埋まることはなかった。

その後、伊佐君は五十年の空白を埋めるごとく勉強し、ネクスト・ワールドの仕組みを転用した『電脳世界パラダイスX』というオンライン仮想現実ゲームを実用化することとなる。

彼の尽力により仮想現実のさらなる医学方面、軍事方面での運用が進むこととなったのは余談である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9855t/>

電脳世界『ネクスト・ワールド』

2011年11月12日12時45分発行